

～絆～ 東日本大震災 被災地支援「まけないぞう」プロジェクト

ー被災者の生き甲斐・仕事・コミュニティづくりのためにー



ーきっかけがなくて何もできないと思っている人、いませんか。

私がきっかけになります。少しの時間を提供し合って、“なにか”できることをやりませんか。

■連絡先：倉田薫子 kaoruko.kurata@gmail.com

【これまでの経緯】

阪神・淡路大震災の起きた16年半前、私は千葉県に住む高校生でした。

生徒会の仲間5人と兵庫区須佐野公園の救援グループに初の「高校生軍団」として入ったのは3月半ば。公園テントに宿泊し、瓦礫の焼け野原の中を毎日自転車で走り回った日々が昨日のように思い出されます。以来細々とですが、ずっと災害支援にかかわってきました。

今回の東日本大震災での被害は、阪神・淡路大震災を超えるといわれています。当時一緒に活動していた仲間は、被災地入りしています。一方の私は、今すぐにも飛んでいきたい気持ちがあるのに、実際にボランティア支援に関わるツテを持っているのに、地球の裏側から祈ることしかできない今の状況がもどかしくて仕方ありません。

今すぐ、何かできることをー

被災地 NGO 協働センター（神戸市）では、現在「まけないぞう」プロジェクトを展開しています。この団体は16年前に私がお世話になった公園のテント村を母体として発足しました。今では水害や噴火、海外の地震・津波など幅広い災害支援を行っています。

【「まけないぞう」とは…】

「まけないぞう」は阪神大震災のあった16年前に、神戸の仮設住宅で生まれました。あのころ、日本にはまだ「ボランティア」という概念もなく、大規模災害に対するスキルも全く持っていませんでした。ただ「何かしたい」と思う人たちが全国から集まり、手探りの中で生き残った命を守るために考え、動いたのです。

被災者の方々は震災直後には避難所で近所の人と顔を合わせ、励まし合うこともできていました。しかし仮設

住宅は抽選で、しかも広い土地のある遠い山の端に建設されました。そのため元々あったコミュニティが崩れ、周りに知人がいない環境へ引っ越さざるを得なくなってしまいました。また弱者を優先したために地域全員が弱者となり、何かあった時に「支え合う」こともできなくなってしまったのです。仮設住宅には当初集会所もなく、次第に人々は引き籠ってしまいます。夏になりプレハブの仮設住宅は室内温度が 50℃を越えても、引き籠り。イベントを企画しても外に出るのは一時だけ。ボランティアが安否確認に奔走しても、出てきてくれない人も多くいました。

その結果「孤独死」が問題になり始めます。ボランティアは異変に気づいていても、ドアを開けることが許されません。引き籠っていた人が一人死んでいても、誰も気づくことができないのです。「孤独死」の前には「孤独な生」がある。この辛い現実、ボランティアに衝撃が走りました。

そんな中、被災者の一人が「こんなんでいい」と持ってきたのが、タオルでつくったぞうさんでした。無機質な仮設住宅群の中にテントを張ってぞうさんを作るイベントをやってみると、仮設にすむ人たちが「かわいい」「私にも教えて」と出てきてくれるようになり、そこで知人もできて新たなコミュニティが形成されました。これによって近所づきあいも話題もでき、引き籠りや孤独死が減少したのです。

その後、中越地震でも「まけないぞう」が被災者同士のコミュニティ作りに貢献しました。

今回、非常に早い段階で「まけないぞう」プロジェクトが発足しました。たくさんの人が身近な人を失い、家も仕事も失い、絶望の底に居る中で、かわいいぞうさんはどんな人にも一瞬の笑顔をもたらします。

娘が津波で流されたおばあちゃんは「夜になると余計なことを考えてしまうけど、ぞうさんをつくっていると夢中になるから津波のことも忘れられる」と言います。そうして生まれたぞうさんは、娘の分身。

避難所の厳しい環境でストレスが溜まってしまう人たちも、やることなく暇で暇で気力が削がれていってしまうという人たちも、ぞうさんづくりを楽しみに待っています。ぞうさんとともに避難所の中でのコミュニティも生まれます。

遠くからお見舞いにやってくる親戚に、何もお礼ができないと言う人も、ぞうさんをあげるととても喜んでもらった、と嬉しそうに話します。まだ自分にもできることがあった。そういう喜びをつないで生きている。

仮設住宅に移って「知っている人がいなくて、まるで外国に来たみたい」という旦那さんを流されたおばあちゃん。ぞうさんをあいさつ代わりに近所の人に配っているそうです。

一方で街ごと流れてしまったので、仕事もありません。「まけないぞう」を作ることで、ほんの僅かですが収入にもなります。仮設住宅は災害救助法適用範囲外になるので、救援物資を受けることができず、食費や光熱費などがかかります。しかも2年のちには仮設住宅を出なくてはなりません。特に高齢者は今後の生活に不安を抱きます。少しでも収入を確保できれば、被災者の自立支援にもなるというわけなのです。実際にただ作るだけよりも、それが何かのかたちになることで、「張りがあるなあ、初給料だ〜」とおっしゃるおばあちゃんも。

生き甲斐、仕事、コミュニティ作り。阪神・淡路大震災で身をもって得た教訓を載せた「まけないぞう」が、16年経った東北で、また新たに出発しました。「まけないぞう」は1個400円で販売しています。これを購入していただくことで、ほんの少しの支援ができます。

■ぜひ詳しく見てみてください！

「まけないぞう」で検索！ http://www.pure.ne.jp/~ngo/zou/index_j2.html

大規模災害は長期戦です。目に見える物理的な復興だけではなく、被災者一人一人が生きてて良かったと思える復興支援が必要なのです。そしてそれは私たちの使命でもある。

自分の目で見たことは確かです。巷に溢れる情報に惑わされず、まず自分の目で見て、考えること。そして伝えていくこと。それが重要なのだと私は考えます。だからもっと知ってほしい、被災地で何が起きているのか。どうしたら「最後の一人まで」復興に取り残されることなく生きていけるのか。目に見える復興ももちろん大事だけど、物理的な復興に心が置いてきぼりになってはいけない。

きっかけがないなら、私がそのきっかけを作ります。少しの時間を皆で提供し合って、“なにか”やってみませんか。

【今、誰にでもできることは次の3つです】

① 被災地支援に実際に行きたい！と声を上げること

連絡先：倉田 kaoruko.kurata@gmail.com

8月中旬～下旬に岩手へ行くボランティアを組織中です
(神戸大学と共同) 参加者大募集中！

② 「まけないぞう」を購入すること

問い合わせ先：被災地 NGO 協働センター

TEL : 078 - 574 - 0701 FAX : 078 - 574 - 0702

Email : ngo@pure.ne.jp

URL : <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>

③ 「まけないぞう」の材料(タオル)を提供すること

送り先：〒651-2271 神戸市西区高塚台4-3-1

Chimei-Innolux, TPO ディスプレイズジャパン株式会社

気付 被災地 NGO 協働センター

※同社はボランティアとして、スペース提供およびタオルの整理・仕分けを担当して下さっています。



■躊躇しているなら、まずは私に直接連絡をください。

連絡先：倉田 kaoruko.kurata@gmail.com 「まけないぞう」購入、新品タオルの受け付けも、取りまとめます！

<現地からのレポート>

【「まけないぞう」のある一日①】

午前、大槌町の避難所へ。外は雨。小さな避難所でぼんやりとテレビを見る人たち。空気がこもって健康的な感じではない。我々が訪ねると数名の避難者の方が、裁縫道具を持って輪になって座った。「ここどうやるの？」「糸は切っちゃいけないのね」…神戸大学の学生 Tさんが「まけないぞう」を完成させると、ぼーっと寝転がってテレビを眺めていた男性が「それ、かわいいね。くれんかな？」「もちろん、喜んで！」Tさんも男性もうれしそうにしている。これが「まけないぞう」の力。



午後、K 中学校の体育館へ向かう。莫塵を敷いた体育館に数十家族が避難していた。「まけないぞう」を広げると、あっというまに人だかり。みんなで輪になってぞうさんづくりがはじまる。和気あいあいと進み、気が付くと 3 時間以上が経っていた。皆、我々が来るのを楽しみにしているのだ。「避難所にも暇だねえ。」「だんだんボケてくるわ〜」「かわいい〜、でも鼻が曲がっちゃった」



毎日内陸の後方支援基地から何十キロも移動しながらの活動。集落がリアス式海岸の湾にそれぞれ分散しているの、大掛かりな支援がしにくい。初期には小さい集落やアクセスの悪い集落には支援の手も及ばなかった。時間がたっても、こうして後方支援が通うのはなかなか大変だ。



道すがら、あちこちに目につくのは「災害復旧支援ありがとう」「勇気・希望をありがとう」という看板。自治体や学校だけでなく、個人宅に手書きのものも。驚いた。ただ「行かなくちゃ」と思って来ているだけの行為にお礼を言われるなんて。書いた人たちは、つらい状況で今日も過ごしているはずなのに。

【「まけないぞう」の一日②】

朝から陸前高田の T 高校グラウンドの仮設住宅へ。初めて仮設の中に入った。1DK の部屋には、クーラーとテレビ。台所の家電はそろっている。しかし…避難所は確かにプライバシーもなく、騒がしくて落ち着かない。でも仮設だって、最低限度の生活ができるかどうかだ。正直、避難所よりはマシ、避難所生活の後だからありがたく感じる、というレベルの住まい。これでほっと一安心、なのだとしたら。

仮設住宅が建てられるところは砂利敷きだ。私でも足元を取られる。こんなところを高齢者が歩くななんて、危なくてしょうがない。しかも避難所近くにあった診療所まで、炎天下 40 分もかけて歩いて通うのだと言う。

ここで今日はテントを張り、愛知から来たグループのカフェと我々の「まけないぞう」づくりが行われる。一軒一軒ドアをたたいて今日のイベントを知らせる。人が集まってきた。まずは愛知名物「小倉トースト」をいただき、ぞうさんづくり。予想よりはるかに多くの方が集まって、炎天下のテントは大賑わい。初めて会った人が手を動かしながら話をする。こうやってコミュニティができるのだ。また来てね、来週ね、裁縫箱が足りないよ、またもってくるね。私たちの役割はまだ続く。



帰り道、通称「奇跡の 1 本松」に寄り道。高田松原は有名な景勝地で 7 万本の松並木があったという。津波ですべてが流された、たった 1 本を除いて。その 1 本も潮をかぶり、塩水が染み出して枯れる寸前。しかしこの松はみんなの希望。6 月半ば、クローン成功が報じられた。陸前高田が再生したとき、この松の木は町のシンボルになるだろう。



【実録：東日本大震災 3 か月が経過して】



◇積みあがる大破した車。衝撃の大きさがわかる。
乗っていた人は無事だったのだろうか。

◇都市近郊ではすでに瓦礫も撤去され更地がみられる。



◇奥に見える防砂林の 1 本だろうか、根こそぎ
流れてきた松の木が残されていた。

◇山を越えた集落では、まだまだ瓦礫がそのままだ。
「物が豊か」とはどういうことなのか、考えさせられる。



◇津波の後に襲った火事で壊滅的な被害が出た。
潮で錆びたプロパンガスのボンベが転がっていた。

◇この光景を前に何をがんばればいいのか、とつぶやかず
にはられない。



◇これだけ鉄筋が入っている電柱が、いとも簡単に折れてしまう。



◇ごろんと横倒しになった建物。ありえない光景に一瞬何が起きたのか理解ができない。



◇流され転がったタンク。周囲は魚が腐って硫化水素が充満している。



◇塩害か火事か、山の端が枯れている。枝に下がる瓦礫を見ると、自然の前に人間がいかに無力であるか認識する。



◇瓦礫の向こうにぼつんと残る防災対策庁舎。最後まで防災無線で呼びかけていた職員は生還したという。



◇祭壇の前でずっと佇む地元の人。大事な人を亡くしたのだろうか。



◇潮をかぶって枯れていた松の木に新芽が吹いた。
復興の一步に見えてまぶしい。

◇全国各地、世界中から駆け付けたボランティアの輪。
まだまだ世の中捨てたものじゃない。



◇災害弱者である子どもに寄り添うのも、大事な
ボランティア。

◇毎朝の出陣光景。今日もがんばろう！

■仲間になりませんか。まだまだできることがあります。

連絡先：倉田 kaoruko.kurata@gmail.com

(2011.7.5)